

研究テーマ	[Ⅱ 想い(発想・想像・構想)を広げ、深めること] 発想を具体化し、表現力を高める学習指導の在り方 ー中学3年生「自画像」の実践を通してー
-------	---

石岡市立八郷南中学校 教諭 岩井 基生

1 研究テーマについて

「中学校学習指導要領解説美術編」第1節教科の目標ー2「各学年の目標-第2学年及び第3学年の(2)」に「対象を深く見つけ感じ取る力や想像力を一層高め、独創的・総合的な見方や考え方を培い、豊かに発想し構想する能力や自分の表現方法を創意工夫し、創造的に表現する能力を伸ばす。」とある。これは、対象を見つけ感じ取る力を高めることと、発想や構想を基に創意工夫し美しく表現する技能に関するものである。教科の目標には「感性を豊かにし」という内容が掲げられ、育成したい感性とは様々な対象・事象からよさや美しさなどの価値や心情を感じ取る力であり、創造活動において判断やイメージをしたりするときの基になる力として働くものである。これらを踏まえ「感じ取る力」と「それを基に発想や構想をし、主題を生み出すこと」を重点的に捉え、表現力を高める学習指導について考察することにした。また、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して」の部分から表現力・コミュニケーション能力を高めるための手立てや、基礎技法の習得から発展的な発想への展開の工夫、発想・構想を広げるための手立ての工夫について実践研究を進めた。題材とのかかわりを深く考え、個々の発想をより豊かに広げられる課題提示の方法や、様々な素材との出会い、技法を生かした発想の広がりの手立てを工夫していきたいと考えた。

授業実践では自画像の制作を通して、表したい心情などの主題を明確にさせ、創造的な表現方法を工夫できるような学習指導の在り方について考えた。本校の生徒は、全体として題材に対して真剣に取り組むことができている。これまでに発想や構想を具体化し表現していく手立てを工夫しながら学習指導を行い、主題を明確にもちながら制作に取り組もうとする力は身に付いてきている。一方で、第3学年では「自画像」を題材に取り入れているが、前年度までの自画像制作では、主題よりも「人物画を描くこと」や「似ているか似ていないか」ということに大きな抵抗を感じ、制作過程で形をうまく捉えること、本人に似ているように描くことに意識が傾いてしまいがちであった。それでは明確な主題を見出すことが容易でなくなり、のびのびとした表現ができなくなってしまう傾向があり、絵を描くことに抵抗のある生徒は最後まで制作意欲を保つことができなかった。「似顔絵を描く」という考え方になるのではなく、今の自分の「内面」や「心情」を表現することへ関心をもたせ、のびのびとした表現になるような工夫が必要であると考えた。

また、制作の意図についての発表会などの言語活動を充実させた内容を授業の中で意図的・計画的に取り入れることで、個々の主題を明確にさせ、発想を深める手立てとしての工夫も必要であると考え、本研究に取り組んだ。

2 研究の実践

(1) 基本的な考え方（テーマに迫るための手立て）

i 心情を感じ取る力を高める手立て

様々な作家の画集から「今の気持ち」に近いと感じる人物画を探し出す活動の中で、描かれている人物の心情を「感じ取る」力を高められるようにする。

ii 「似顔絵」ではなく内面を表す表現技法を身に付けさせる手立て

選んだ作品を簡易的に模写することで、作家の技法を知り、「似顔絵を描く」という意識からの逸脱を図り、自分なりの表現方法を得る喜びを感じさせ、のびのびとした表現ができるようにする。

iii 制作過程において、発表などの言語活動により主題をさらに明確なものにさせる手立て

ある程度制作を進めた状況で自己の制作を一度振り返り、発表することで、改めて主題を明確にさせ、制作意欲の持続と、より質の高い表現ができるようにする。

(2) 授業実践

① 題材名「15歳の私～自画像を描く～」A表現 3年 H23.4月～6月 実践

② ねらい

- 自分自身と向き合い、自分のありのままを肯定的に表現しようとしている。
- 自己表現としての主題が明確で、ポーズや構図を有効的に考えることができる。
- 主題表現にふさわしい技法、構図、色調を考えて制作することができる。

③ 指導にあたって

ア 題材観

15歳は中学校生活最後の年であり、自分の進路について考える時期である。身体的にも精神的にも不安定で自分自身を見失いがちになるのもこの時期である。自画像を描くことは、自分を見つめ、自己との対話をしていくために適した題材と考える。これまで学んだ絵画制作の技法や知識を生かし、幅広い発想で生徒自身の内面をよりよく表現できるような支援、指導に努めたい。

イ 指導観

一人一人の豊かな発想を大切に、制作に対する意欲を高められるような指導・援助にあたりたい。導入で、自己を見つめることの意義を伝えた上で、人物、特に顔を描くための基本的な技法を指導することで自画像への抵抗感を減らせるように支援したい。様々な画集の中から人物画を探し、心情や制作する上での参考となる表現方法を発見し模倣しながら、自分らしさを生き生きと表現できる場の設定や学習の展開に努めていきたい。また、鑑賞の時間を設け、自他の作品の努力点等を認め合い、表現のおもしろさを味わえるような配慮をしていきたい。

④ 指導計画（9時間扱い）

次	時	主な活動・内容	指導上の留意点	具体的評価規準・方法
一	1	○ 自画像を描く意味、目的について知り基本技法を学ぶ。	○ 自分を見つめることや人物画の基本技法を提示する。	○ 課題を理解し、人物画への関心をもととする。 (関心・意欲・態度)
	2	○ 肌色の基本的なつくり方を知る。	○ 自画像への抵抗のひとつとして、彩色の方法が挙げられるので、基本的な技法を学ばせる。	○ 定められた配色を基に、自分らしい彩色方法を考えることができる。 (創造的な技能)

二	3	○ 様々な人物画の中から、自分にあった表現を探す。	○ 内面を表現させたいので、心情を読み取って選ぶように支援する。	○ 自分にあった表現を探ることができる。 (関心・意欲・態度、発想・構想の能力)
	4	○ 選んだ絵の表現技法を真似て描いてみる。	○ 作者の画風を真似て、表現技法を習得できるようにする。	○ 表現方法の特徴をとらえ、自分なりの表現方法を見付けることができる。(創造的な技能)
三	5	○ 構図や制作手順を考え、下絵を描く。	○ 似顔絵を描くのではなく、内面を表現できるように指導する。	○ 主題を明確にし、自分らしい表現をしようとする。(創造的な技能)
	6	○ 制作途中の作品及び発想の内容を発表し合う。	○ 制作を始めた段階での主題を明確にさせ、発表し合う中で、互いに刺激し合えるようにする。	○ 友達の発表を聞き、今後の制作に生かそうとしている。 (発想・構想の能力、鑑賞の能力)
	7 8	○ 各自の主題を明確にもって制作を進める。	○ 完成まで意欲が持続するように主題を毎回確認させる。	○ 主題を明確にし、自分らしい表現をしようとする。(創造的な技能)
四	9	○ 自分や友達の作品を鑑賞し合う。	○ 自分や友達の完成作品を鑑賞し合い、そのよさや美しさを味わえるようにする。	○ 自他の作品を鑑賞し、表現のよさや美しさを味わうことができる。 (鑑賞の能力)

(3) 研究の実際

導入段階では、正中線などを用いた人物画の基本的な描画方法や、肌色の作り方や塗り方などの基礎技法を習得させる時間を設定した。人物画への抵抗が多いため、分かりやすく楽しめるような場の設定を心がけた。

第2段階では、教室に様々な種類の作家の画集を広げ、自由に見て回れる学習環境を準備した。それら画集の中から「気になる人物画」を選ぶように指示をした。「気になる」という言葉は抽象的であるが、そこには学習指導要領解説の中の〔共通事項〕にあるように、「形や色彩、材料や光などの性質やそれらがもたらす感情を理解すること」を念頭に考えさせ、心で感じ取るものを重要視できるように指導した。ワークシートには選んだ理由を「～な感じ」と表現できるようにして、「A表現」における指導事項にあるように、感じ取ったことを基に主題を生み出すことにつなげるように指導をした。さらに、選んだ作品を小さな画面(画用紙)で簡単に模写を試みる活動を取り入れた。模写の学習については、第1学年での既習内容であるため、模写の方法を学習する目的ではなく、作家の筆使いや技法を意識して真似るように指導をした。

第3段階で、本番の画用紙を用意し、制作に入った。これまでの段階で感じ取ったことを基に、自分の内面や感情を表現できるようにと指示をした。その際、選んだ絵の中に自分自身をはめ込んでもよいし、新たな画面構成で描いてもよいという声かけをした。ただし、見ても見なくても必ず手元に鏡を置いて描くことを必須条件とした。なぜなら、鏡をじっくりと見て描こうとすると「似顔絵」になってしまいがちであるが、置いてある鏡に自分の顔がいつも自然と視界に入る状態を意図的に構築することで、じっくりと見なくても自分の顔が「そこにある」という事実により、絵の中に自分が自然に投影されていくと考えたからである。その結果、選んだ絵を基に自分自身を置き換えて描いた作品は、基の絵に近いけれど、どこことなく本人に見えるという世界観を出すことができていた。

そして、制作を進め始めた段階で、途中の観賞会（発表会）を行った。50分間の活動の中で、導入時に「発表会の意図」を説明した後に10分間は制作を進めさせた。その間に頭の中で自分自身の作品の主題などを整理させる目的があった。次に発表の準備をし、一人1分間で作品の主題を「どんな感じ」という言葉を使いながら発表する時間を設定した。一通りの発表が済んだあとに、残りの時間をまた制作にあてた。50分間の活動の途中に発表の時間を設けたことは、次の制作へのつながりがスムーズにしたかったからである。発表をすることで、自分自身の主題が明確になり、他者の発表を聞くことで参考にしたい方法などを、すぐにその場で制作に生かすことができるからである。そして、次時以降はそれぞれの制作を続ける時間とした。それぞれの主題が明確になっているために完成まで、意欲的に制作を続けることができた。作品完成後にもう一度、主題などを中心に自分の作品について発表する観賞会を行った。自分の作品について表現したかった思いなどを、自信をもって発表する姿が見られた。

導入段階	<ul style="list-style-type: none"> ● 基本的な技法の学習 =人物画を描く抵抗感を減らすきっかけづくり
第2段階	<ul style="list-style-type: none"> ● 様々な人物画の鑑賞 及び 模写 =心情を「感じ取る」活動 =作家の表現技法の模倣により、独自の技法を習得する。
第3段階	<ul style="list-style-type: none"> ● 制作活動 =作家の技法を手段として取り入れ、「思い」を表現できるような手立ての工夫 =鏡を手元に置くことで自然と本人らしさが投影できるような手立ての工夫 <div data-bbox="1023 1003 1417 1294" style="text-align: right;"> </div> <p style="text-align: right;">〈図1〉基の絵と鏡を置いて描く様子</p>
制作途中	<ul style="list-style-type: none"> ● 途中の鑑賞会（発表会） ※ 発表会の流れ【50分間】 ①制作をすすめる。（10分間） ②発表内容を考える（5分間） ③発表会を行う（20分間） ④制作の続きを行う（残り時間） =前後に制作の時間を確保することで、気付いたことをその場で実践できる場の工夫をした。 =個々の主題を明確にする。 =他の人の発想を参考にする。 =制作意欲の継続への手立て <div data-bbox="1023 1384 1417 1675" style="text-align: right;"> </div> <p style="text-align: right;">〈図2〉制作途中発表会の様子</p>

2 研究の成果

本研究では、「i 心情を感じ取ること」「ii 似顔絵制作ではなく、自己の内面を表すこと」「iii 主題を明確にすること」を通して、のびのびとした表現ができるような学習指導の在り方を模索した。授業後の感想でも47人中43人の生徒が「最後まで集中して楽しく取り組めた」と答えた。図4にあるように生き生きとした作品が多く見られるようになった。また、授業後の感想で「想いは文字で表現するものだと思っていたが、絵の方がうまく表現できると思った」という内容があり、主題を明確にさせて最後まで表現することができたと判断ができる。



昨年度までは、自画像を制作する過程で、主題を考え、「想い」や「内面」を表現しようとしても、技術面でうまく表現できずに途中で挫折してしまう生徒が多く見られた。しかし、本研究では作家の技法を模倣し表現の手段として用いることで、技法面での抵抗を減らし、明確な主題のもとでのびのびとした表現活動ができていた。研究テーマにある「想いを広げ・深める」ためには、明確な主題をもたせる手立ての工夫と主題を思い通りに形に表すことができる手立ての工夫が重要であることが分かった。

3 今後の課題

この題材を進める上で、選んだ絵の中に自己を投影させる構図をとった作品は47人中34人であった。残りの13人は、模写まではできたが、実際の作品となると図3のような構図をとって、画面をまとめようとしていた。今後は、さらに多くの生徒がのびのびと自信をもって表現活動ができるような工夫と、「より自分らしい表現」ができるような学習指導の在り方を研究していきたい。